

〔論文〕

人間のコミュニケーション能力の基礎について
 ——理性的存在である人間のコミュニケーション
 能力の基礎に関する形而上学的考察——

岡部 勉

**On the Basis of Communicative Abilities of Human Beings:
 A Metaphysical Inquiry into the Basis of Communicative Abilities of
 Human Beings as Rational Beings**

Tsutomu OKABE

要旨 (Summary)

What is the basis of communicative abilities of human beings as rational beings? To answer this, we must start from an amazing story of transubstantiation of a biological substantial type, *homo sapiens*, into a new non-biological substantial type, *person* or, Paul Grice said in a passage, *metaphysician*. I suppose this kind of thing would have happened to all of us when we should have become rational. I'm not sure when it happened to me, though I think it certainly happened to me as it had happened to the initial human beings many thousands years before. Why do we need such a transubstantiation? Grice's answer is very simple: rationality demands it. We are born initially as human beings who are accidentally rational beings; then we are to become, through radical alteration of rationality, essentially rational beings. And this radical alteration gives, I say, the basis of communicative abilities of human beings as rational beings. Human beings alter into new substances, Grice suggests, for themselves; because no genetic device can produce such a metaphysical transition. Without such an alteration, you could do many things; but your activities should be strongly relativized to the natural purposes and natural desires. Those relativized end pursuers need no radical alteration of rationality. However, if you could be a non-relativized end pursuer, a pursuer of absolute value and finality, as in fact you are, then some remarkable thing should have happened to you at some stage of your maturity; and, according to Grice, it should be the alteration of rationality. Why are we to change our own beings from accidentally rational beings to essentially rational beings in order to become pursuers of the non-relativized final good? The answer could be: because, having evolved towards extending abilities to react flexibly to natural and social demands, finally to those demands born newly among our small societies, we have had to proceed for ourselves to

the stage in which we should act freely and deliberately, purposefully and rationally, explicitly or implicitly intending to act well and live well; in which we should pursue, freely in principle, our final ends or an end of absolute value.

キーワード：コミュニケーション、言語、理性、人間性、価値、形而上学

序

1 「理性的存在である人間のコミュニケーション能力の基礎」を問題にするということが一体何を意味するのか、少し説明が必要かも知れない。私がここで目指しているのは、単純に言えば、日常生活において私たちが互いに理解し合う（互いに言っていること、していることを理解し合う）ということが成立するためには、一体何が必要であるのか、それを何らか明らかにすることである。そして、それが何であろうと、その必要であるものというのを、ここでは「コミュニケーション能力の基礎」と呼ぶことにする。また、ここで「コミュニケーション」というのは、嘘をつくとかごまかすとか、逆に嘘とかごまかしを見抜くとか、こころを読むとか顔色を窺うとか、そういったことをすべて含み、更には、恨むとかうらやむといった感情的なやりとりの一切を含む、人と人との言語的・非言語的なやりとりの全体を意味するものとする。

私たちはコミュニケーション能力の基礎を問うことにおいて、人間が理性的存在であるとはどういうことであるのか、そもそも人間であるとはどのようなことであるのか、理性的能力はどのような意味で自然的であると同時に非自然的であるのか、理性的能力は自然的・非自然的な目的とか価値に対してどのような関係にあるのか、そもそも目的とか価値というのはどのようなものであるのか、というような問いのすべてに関わることになるであろう。私たちの問題は、少なくともその或る部分は、極めて形而上学的なものである。そして、私のここでの意図は、そのような問題についての形而上学的考察に関する「戦略的構想」を示すことにある。

「理性的存在である人間のコミュニケーション能力の基礎は何であるか」という問いに対して、例えば「言語能力」と答えるのも一つの手であると思

われよう。しかし、これは私が求めている答えではない。私が求めているのは、仮に言語能力が問題であるとして、基礎であるというのは言語能力のどの「部分」かというようなことである。多分「部分」という言い方は正しくないであろう。別の言い方をすれば、私が求めているのは、通常の意味で「成人」とみなされる大人にとっては、そういう大人であるために「最低限必要」とされるが、子供にとっては、まさに子供であるが故にそれは必要とされない、そういうものである。私たちの社会では、或る種の判断能力とか責任能力に関して大人と子供の間には違いがある、区別を設ける必要があると考えられている。同様の区別は、もはや子供ではないが、或る種の条件を満たしてはいないと判断される大人と、それを満たしていると判断される大人の間にも設ける必要があると考えられている。これは要するに、私たちは「理性的」ということを、何らか「成熟」とか「完成」というようなことと結びつけて考えているということであろう。私たちの遠い祖先についても、それと同じように「理性的」ということについて「成熟」とか「完成」ということがあったと言えよう。私たちの遠い祖先に生じた「変化」とはどのようなものであったのか。それは（私が想定しているように）コミュニケーション能力の「変化」と言えるようなものであったのか。

私のここでの目論見は、結局は「人間性の定義あるいは再定義の試み」に関わるものである。私の人間性の理解は、別の機会に述べたことがあるのだが、明白に「反自然主義」の立場に立つものである。ここでは、私たちはなぜそういう立場に立つべきであるのか、そのことについて正面から議論することからはじめることにする。しかし、人間について特に「理性的」ということを言う場合に、人間性の理解に関して反自然主義の立場に立つということは、例えば「理性と感情の対立」というような図式をはじめから採用することを、直ちに意味するものではない。自然的な感情とか自然的な欲求に対して理性とは何であるのか、結局のところ、私たちはそれをもう一度問い直すことになるであろう。

2 私は以前、自分が反自然主義の立場に立つということを明白に表明したことがあるのだが、自然主義あるいは反自然主義の意味について、必ずしも

明確ではなかったかも知れない。^{*1} そのような趣旨の批判が後に寄せられた。この点に関して、私はその後、私たちが「ヒトから人間になった」そのなり方を問題にすればよいということを知った。私があることを知ることになったのは、人類学者とP・グライスとからである。もちろん、彼らは同じことを言っているわけではない。グライスは反自然主義者であるが、人類学者はもちろん反自然主義者などではない。私たちがどのようにして人間になったかに関してグライスは「実体の変容」ということを言う。人類学者はそういうことは言わないが、彼らの言う「象徴の爆発」というのは、私たちの祖先がヒトから人間になったそのなり方に関して、グライスの議論と重ねて考えると示唆的である。私は以下で、私たちの祖先がかつてヒトから人間になった（あるいは私たちが今ヒトから人間になる）ということによって一体何が問題になるのかを、両方の議論を前に置いて考えることにする。

ところで、グライスは、実体の変容は「自発的」なものであると言っている。この場合の「自発性」の意味は、この変容が先天的・遺伝的機構によるものではないということを使うものであろう。つまり、人間の自然的な身体的仕組みとか自然的傾向とかによるものではないという意味である。このことを疑う人がいるかも知れない。しかし、これは完全に真実であると私は思う。私たちは自発的に、自力でヒトから人間になるのである。^{*2}

だが、それを言う前に、自然主義の誤りをはっきりさせることから始めよう。

I. 自然主義の誤り

1 初期の自然発生的な小集団社会のことを考えてみよう。ここでは、どれくらい初期かということの問題にする必要はない。どこにいた集団かを問題にする必要もない。ホモ・サピエンスの集団であったかどうかということすら問題にしなくてよい。どこか或る時点までは、どこにいたとしても、私たちの祖先が自然発生的な小集団社会を形成していたということは、間違いなく真実であるとされよう。ここでは、そのような「自然発生的な小集団社会」を形成していた、私たちの遠い（しかし、他方ではそう遠くないとも言える）祖先が問題である。

彼らの使用する言語は未発達であったとしよう。どの程度かは別にして、言語が未発達であったとすべき段階はもちろんあったと考えられる。しかし、既にかなり多くのことを知っていると言える段階にあったかも知れない。もちろん、それがどの程度であったかは問題である。知的能力の発達は、食料と安全の確保に関して、及び集団の維持に関して、有利に働いたであろう。前者に関しては、食料についての知識、例えば食べられるものと食べられないものの分類に関する知識、いつでもどこでとれるか、どうすれば食べられるか、といった知識、そういった知識の獲得と蓄積、それと道具の発見・発明を含む食料と安全確保のための技術の発達と伝達、この二つが主要な問題であったろう。後者に関しては、個体の識別と序列の認識に関わる能力、それと敵意と欺瞞、背信と離反を察知する能力、主としてこのような認識能力が問題であったろう。以上のような知識・技術・認識能力の発達は、言語の発達と同時でなければあり得なかったであろうか。

言語の発達は、以上のような知的能力の発達とは、基本的には無関係であったかも知れない。^{*3} 人類が音声を比較的自由に出来るようになって最初にしたことは、言語学者が示唆するように、母親が乳児にするように他人の機嫌をとることと、幼児が母親にするように自分の思い通りに他人を動かすことであったかも知れない。この延長上にあるのは、他愛のないお喋りと説得・懇願・依頼・命令・禁止等の言語行為であろう。他愛のないお喋りは仲間の話題であろう。お喋りにもそれ以外の言語行為にも、表情・身振りに加えて抑揚・叫び声・泣き声・呻き声等の音声的手段を含む、多様な言語外的手段が伴ったであろう。実際には、言語外的手段が先にあつて、言語が後から付け加わったはずである。いずれにしても、このような言語外的手段と簡単な動作語・状態語と指示語（あるいは、それが何であれ、とにかく指示を可能にする手段）があれば、基本的な言語行為とお喋りは可能であろう。ピジンと呼ばれる現代の混合語が、言語の初発形態が何を含まかに関して、少しは想像を容易にしてくれるかも知れない。

言語はもちろん分類の指標として使えるし、識別の指標としても使える。しかし、言語が全くなくても、食料に関する知識や道具に関する技術の発達はあり得るし、欺瞞や背信を見抜く認識能力の発達もあり得ると思われる。

言語が加われば、嘘をつく能力が飛躍的に高度なものなるように、知識・技術・認識能力の発達も、それによって飛躍的なものになるということは考えられる。しかし、知能の発達と言語の発達は、基本的には区別して考えるべき二つの異なる出来事であったということもあり得る。言語がなければ、知識の保存と伝達は、或る場合には困難である。それは容易に失われるかも知れない。しかし、自然の領分にある間は、多くの場合、見て覚える・体で覚えるという記憶による保存形式があれば十分であろう。言語がなくても十分、即ち、自然的な世界を自然発生的な小集団社会で生き抜くには十分、知能は発達し得たと考えられる。言い換えれば、自然的な世界を自然発生的な小集団社会というやり方で生き抜くには、言語はそれほど発達する必要がなかったのではないか。^{*4}

では、なぜ言語は発達したのか。人類の歴史は、数百万年に及ぶその歴史からすれば、ごく最近まで、基本的には安定した狩猟採集的な自然発生的小集団社会の歴史であったと考えられている。石器の変化も百万年単位の変化である。数十万年前から、一部の地域で、石器に関して様式の変化らしきものが、十万年単位で見られるようになる。だが、後期旧石器時代以降の変化に比べれば、この間には大して何も変わっていないとも言える。この間に、言語が発達する特別な理由は、実は何もなかったかも知れない。或る言語学者は、特定の小集団社会で言語が特別に発達した可能性があるとする。しかし、なぜその小集団社会で発達して、他の小集団社会では発達しなかったのか。言語の発達は、特定の個人の創意と努力によるものとは思われない。混合語であるピジンは、場合によってはわずか一代でクレオールと呼ばれる成熟した言語にまで発達することがあり得るとされる。だが、それは一つには、発達を促す社会的な圧力が言語使用者に直接かかるからであると思われる。即ち、ピジンを母語とする子供たちの世代は、貧弱なピジンでは複雑な現代社会の時間的・空間的構造とか様相的構造に適應して生き抜くことができないから、自分たちの言語を例えば助動詞とか前置詞とか時制に関して、社会の要求に合わせて急激に発達させる必要に直面することになる。そういう外圧としての社会的な圧力があって、しかも既存の英語等の言語的素材が十分揃っているのだから、彼らの言語は急激に成熟することができると考え

られる。しかし、そういう圧力も素材も全くないところでは、発達する理由も条件も一切ないと考える以外にない。^{*5}

2 ホモ・サピエンスの自然発生的な小集団社会というのは、直接的には類人猿の、オスの血縁を中心とする（オスの居残りとメスの移動を基本的特徴とする）自然的戦略としての小集団社会のやり方を受け継ぐものとされる。集団を作って安全を確保する。もし食料が（集団の大きさにもよるが）集団を維持するのに十分確保できるのであれば、生き残り戦略として集団を作ることは、もちろん有利に働く。主要な問題は、自然的戦略としての小集団社会を維持していく集団維持システムを自然的なシステムとして作ること、そして集団の大きさに見合った食料を確保するやり方を環境の違いに適合させて開発すること、この二つであったと思われる。

集団維持システムとして取り敢えず考えられるのは、これも直接的には類人猿から受け継いだ、感情というシステムであろう。感情の起源は、基本的には個体の生き残り戦略であったと考えられる。感情の仕組みは、本能的な行動の仕組みの延長上に、本能的な行動を何らか抑止する仕組みとして、あるいは幾らかそれを柔軟にする仕組みとして発達したものであろう。その仕組みはその後、哺乳類の進化の過程で、記憶を含む認識能力の発達と一体となって、集団の生き残り戦略の一翼を担う集団維持システムの機能を持つようになったと考えられる。集団維持機能としての感情の基本的な役割は、自然的な価値と目的の秩序に適合した集団的な評価システムとして機能するということであろう。感情という評価システムの仕組みは、欲求とか欲望という、なぜか私たちが区別して考えているもう一つの仕組みと対をなすものであると考えられる。権力、地位、勝利、名誉に対する憧れと欲望、不正や裏切りに対する怒りと恨み、これらは自然発生的な集団的な評価システムとしての感情と欲望に根ざすものであろう。^{*6}

このような自然発生的な集団的な評価システムが言語の発達を促すということは或る程度あったかも知れない。しかし、重要であったのはむしろ、表情を読みとるとか心変わりを見破るといった認識能力の発達と、逆にそれを隠し通す偽りと欺きの技術の進歩であったと思われる。人間の幼児は4歳くら

いになるとこのような技術を身につけるようになる」とされる。それは自ら自発的に身につける、あるいは発見するのであって、何らかの大人から教えられるのではないと思われる。大人は嘘をつくであろうが、子供にやり方を教えようとして嘘をつくのではないであろう。子供はそれを、教えられることなく見破り、そして自分でも、見破られないような嘘をつくようになる。このような嘘をつく技術というものは、言語が発達すれば、その分だけ発達するようなものかも知れない。しかし、嘘をより上手につくことへの要求がどれ程のものであったにせよ、それによって直接言語の発達が促されることになったとは思われない。総じて、感情という集団的評価システムが言語の発達を何らかし促すことがあったとしても、それは実際には、何か別の要因によって、同時並行的にそのような評価システムの発達と言語の発達とが促された結果として、付随的に相互に発達を促し合うこともあったというようなことであるように思われる。

食料の確保に関する知識と技術の方はどうであったか。食料確保のための知識と技術の拡大と進歩は、言語が極めて未発達であった段階でも、もちろんあったであろう。集団間を移動する女性が、そのような知識と技術を伝達し普及させたかも知れない。だが、そのような知識と技術の伝達と普及にとって、言語は必ずしも必要ではなかったと思われる。必要であったのは、実際にやってみせること、知識や技術の効力を目の前で証明し、かつ伝授することであったと思われる。

確かに、分類の指標となるような音声記号は、徐々に広く使われるようになっていったであろう。今は食べられないが時間がたてば食べられるようになるもの、生では食べられないが一定の時間焼くことによって食べられるようになるもの、こういう発見がどこかの時点であったはずである。人類がこういう自発的な知的能力を持つということは、言語の発達とは無関係に、類人猿の特徴を受け継ぐものとしてもともとあったものであろう。

以上のような事情からすると、自然発生的な小集団社会の構成と維持に関わる内的要因と考えられるものに、直接的に言語の発達を促したと見なされ得る契機を見出そうとすることには無理があるように思われる。人類が自然的世界にあって、自然的世界に普遍的な自然的価値・自然的目的に対する自

然的欲求・自然的欲望によって、全体として条件付けられているあり方を離れることがなかった間は、自然的戦略としての小集団社会の社会性を脱却する必然性はどこにもなかったであろう。知能の発達、そのような小集団社会の維持を容易にするものとして機能したはずである。要するに、知能はそのように使われたと考えられる。感情も同様であろう。そうすると、集団の外に位置する自然的状態・自然的環境の中に、言語の発達を促す外的要因というようなものが何かあったと考えるべきであろうか。しかしながら、外部にあるのは、自然と自分たちと同じような自然発生的小集団社会だけであったと考えられる。*

ところで、私たちのあり方はもはや、自然的世界に普遍的な自然的価値とか自然的目的に対する自然的欲求や自然的欲望によって、全体として条件付けられているということは、基本的にはない。どこかの時点で、そのような自然的価値とか自然的目的というのは、私たちの複雑な価値と目的のシステム全体からすれば、小さくはないかも知れないがそれ程大きくもない、その一部になったと考えられる。要するに、私たちのあり方が変わったのである。だが、なぜそしてどのようにして、そのようなことが起こりえたのか。*

3 問題は、外的自然環境と隣接する集団との関係にあったと想定される。隣接する集団との関係は、基本的には競争する関係であったと考えられる。競争する関係になることは自然における生き残り戦略からすれば必然的であろう。生存のための資源は有限であり、小集団単位で生き残るという戦略をとる限り、集団間の関係は基本的にはその有限の資源を奪い合う関係にならざるを得ない。資源が豊かであれば、競争関係は直ちに敵対関係にはならないかも知れない。しかし、環境が悪化して資源が不足するようになれば、直ちに敵対することになるであろう。潜在的には、隣接する集団との関係は常に敵対的であったと考えられる。隣接する集団に対しては縄張りを主張し敵対する。所属する集団に対しては帰属意識、仲間に対しては身内意識を持つ。集団維持システムとしての感情の発達は、これらを大枠とするものであるように思われる。

感情システムの基本的な部分は先天的・遺伝的なものであると考えられる。

感情という仕組みそのものは先天的・遺伝的なものである。しかし、私たち自身の感情システムは、相当に複雑なものになっていて、何よりも言語能力・認知能力と一体になっているから、全体としてどこまでが先天的でどこからが後天的か、よく分からないものになっている。それに、集団維持システムであるということも、個別的な感情の発現を個別的に見る限りは、直ちには納得できないかも知れない。感情の発現を個別的に見ると、場合によってはひどく理不尽・不合理で、そもそも何のために感情というものはあるのかよく分からないと思わせるようなものであると人は言うかも知れない。感情の合理性というのは、感情というシステム全体の合理性であろう。全体としてみれば、恨みとか妬みといったやっかいな感情の存在も含めて、感情の合理性はかなり明白であるように思われる。恨みや妬みが存在することによって、集団内に或る均衡が保たれるということがあろう。それらが存在しなければ、何かが一方的になる恐れがある。感情の役割というものは総じてこのようなものであると思われる。^{*9}

感情システムそのものは、自然発生的な小集団社会の存続を推進するシステムとして、少なくとも或る時点までは完全にそういうものとして、機能してきたと考えられる。そういうものとして機能するものである限りは、或る時点で自然発生的な小集団社会からの脱却が図られたときに、それは或る意味では全体として、そのような大変革に対する強い抵抗力の源泉にならざるを得なかったと思われる。しかし、大変革は間違いなく起こった。大変革というのは、集団の連合とか合同とか結合が、暴力によらずに、あるいはむしろ暴力的傾向に逆行して、実現されたということである。そのような変革の時代があったことは確かであると思われる。そうでなければ、私たちは依然として現代に至るまで小集団社会を持続させていたはずである。

この変革は完全に自発的なものであったと考えるべきである。自発的であったというのは、小集団社会は何らか必然的に大集団化するように、はじめからそのような自己展開の可能性を潜在的に持つものとして構成されていたという意味では全くない。そういう意味での必然性とか可能性というのは、全く存在しなかったと思われる。ここで言う自発性というのは、この変革を実現した私たちの祖先は何ものにも強制されずに全部自力で、自分で考えてそ

うしたという意味でのそれである。環境の激変はあったかも知れない。恐らくは、相当の環境悪化があったものと考えられる。しかし、それによって連合するように、あるいは合同するように強制されたというわけではない。そういう強制があったとは考えられない。むしろ、逆であろう。隣接する集団との関係は極端に悪くなったはずである。だから、暴力的な傾向も強まったと考えられる。そうした中で、どのようにして連合の、あるいは合同の、協定は結ばれ得たのか。

ここで本当に必要とされる能力というのは、理由に基づいて推論する能力、理由となる幾つかの事実、目的、その他を前提として、そこから、どうするのがよいか考えて結論を導き出す能力、そういう理性的な能力と、そうやって導き出された結論に従って、目的の実現を目指して意図的に行為する能力とであろう。そういう能力以外に、このような場合に役に立つと考えられる能力はないと考えられる。小集団社会を生き抜くための、相手のところを読む能力とか嘘をつく能力、食料と安全を確保するための知識や技術、そういう知性的能力は、ここでは無力であろう。

理由に基づいて推論する能力というのは、獲物の跡を追う狩猟の際に、あるいは狩猟の時期と場所を決める際に、必要とされるような能力である。そのような能力は、恐らくは言語が発達するはるか以前から、人類に備わっていたであろう。意図的に行為する能力についても同様であると考えられる。意図的に行為する能力の発達、目的についての意識と自分が何をしているかについての知識が明確になることを前提にすると考えられよう。だから、言語が発達することは、このような能力が飛躍的に発達することを約束するものであろう。しかし、言語が発達しなくても、あるいは言語が全く存在しなくても、そのような能力は発達し得る。嘘をつく能力の発達がそれを証明していると考えられる。¹⁰

理性的に推論する能力も意図的に行為する能力も自然発生的なものである。これらは、自然の目的・自然の欲求を実現するための、そういう目的とか欲求に相対的な、自然的な能力であったと考えられる。しかし、自然の目的・自然の欲求に相対的・従属的なものとしてのそういう能力が、自然発生的な小集団社会からの脱却が図られようとしているそのときに本当に必要とされ

る能力であるというのでは、もちろんない。

Ⅱ. はじめと終わり

1 理性的推論能力のそのような非相対性・非従属性の実現と言語の発達に対する要求というのは、最初は集団間に生じたものである、そして今でもそれは、基本的には集団間に存在するものであると私は考える。集団間に非敵対的な関係というものが存在する可能性が生じたときに、そのような要求は生じたのであろう。そして、私がここで「理性的存在である人間のコミュニケーション能力の基礎」と呼ぶものは、個人間にはなくて、実際にはそのような集団間に生じた要求に対してある、本来はそのような要求を満たすものとしてあると考えるべきであると思われる。

ところで、そのような非敵対的な関係というのは、最初は、疲弊した一つの集団が通り過ぎるのを他の集団が黙って見ているというような、消極的・防衛的、一時的・偶然的なものであったかも知れない。もっと積極的な関係を考えるには、二つの集団にとって共通の敵となる第三の集団を想定するというようなことが必要になるであろう。強力な共通の敵対集団に対して連合を組んで対抗するという図式である。しかし、積極的な連合関係を築くということは、いつの時代でも、仮に発達した言語があったとしても、必ずしも容易なものではない。人類史上はじめてそれを実現するということであれば、尚更であろう。連合の実現に至るまでには想像を絶するプロセスがあったものと思われる。そのプロセスというのは、現生人類がヒトから人間になった、そのプロセスということになる。しかしながら、私が問題にしたいのは、どのような歴史的出来事とそのプロセスを構成したかではない。むしろ、どのような内的条件あるいは外的条件が揃えば、そのようなプロセスは生じ得るのか、ということである。

外的条件の第一は、恐らくは、集団間に複雑な競合関係が生じたということであろう。単純な競合関係であれば、一方が他方を追い払うか、どちらか一方が出て行くか、基本的にはそのどちらかで解決するはずである。しかし、そういうことでは解決できない状況も生じ得るであろうし、実際に生じたのであろう。^{*11}

第二の外的条件は第一の内的条件かも知れない。これを外的条件とする理由については後で述べることにする。いずれにしても、言語あるいは言語を含むシンボル使用の発達、これが絶対的条件の一つであったと思われる。儀式と制度の発達、これはシンボル使用の発達と（必然的な仕方でも）同時並行的なものであったと考えられる。握手をして肩を叩き合うだけで成立する連合もあるかも知れない。握手をするのも肩を叩くのも、儀式であり制度である。しかも、集団の構成員全員が、連合の成立を理解する必要がある。協定成立の所作による表現、全員が参加する大宴会、結婚の約束とシンボルの交換、すべてが象徴であり儀式である。儀式もシンボルの使用も、部分的には既にあったかも知れない。言語の使用も同様である。しかし、これらは集団間に生じた要求によって或るとき急激に発達したと考えられる。

第一の（あるいは第二の）内的条件は、理由に基づいて推論する理性的能力の、自然の目的・自然の欲求に対する相対性・従属性からの脱却と自立・独立である。何かそのような自立・独立ということが集団レベルで生じなければ、自然的傾向・自然的欲求に基本的には相反する、非小集団的な制度とかシステムを自発的に作り出し、それを自発的に継承し発展させるというような流れを、集団レベルで実現するということが不可能であろう。しかも、理性的能力に生じた変化は、完全に自発的なものであったと考えられる。自発的なものではないということになれば、私たちの推論能力は自然の目的とか価値に対して、依然として相対的なものであり続けているということになる。そう主張することも、もちろん不可能ではないかも知れない。しかし、現在の私たちの生と行為が、最終的に何かそのような仕方でも条件付けられたものとしてあるということは、もはやないであろう。私たちの最終目的・究極目的としての善と幸福の概念は、自然的な目的とか価値についての考え方を何らか内に含むものであるかも知れないが、それ自体あるいはその中心部分が自然的な目的とか価値の概念によって構成されるということはないであろう。善と幸福の自由な追求としての人間の行為は、もっとはるかに複雑な目的と価値のシステムを前提にするものとなっている。自然主義者はそのことに目を向けようとしなさい。

もう一つの内的条件は、善と幸福の自由な追求としての（あるいは単純に、

自由な目的の追求としての) 私たちの意図的行為能力の、可能性としては完全に自由な目的の追求ととしての実現である。しかし、実際には、完全に自由な目的の追求ととしての実現というのは、極めて困難である。アクラシア(意志の弱さ)という現象はそれが困難であるということを端的に示すものであると思われる。アクラシアという現象は、極めて人間的なものである、ほとんど人間に固有の現象であると考えられる。私たちの意図的に行為する能力というのは、基本的には後天的に努力して完成されるものである。理性的推論能力と同様に、下地は自然的・先天的・身体的な条件あるいは可能性として与えられる。だが、それを現実化するのには、これも理性的推論能力の場合と同様、自然の役割ではない。^{*12}

以上二つの内的条件、これが結局は「理性的存在である人間のコミュニケーション能力の基礎」である、これが結論であると私は考える。だが、これが結論だというのはおよそ信じ難いと思われるかも知れない。しかしながら、このような(条件を基礎とする)能力であるというのでなければ、私たちのコミュニケーション能力というのは大した能力ではないということになるであろう。私たちはこのような能力を持つものとして生まれてくるというのではない。私たちはそのような能力・可能性を持つ者になるのである。問題は、どのようにして私たちはそのような者になるか、であろう。

2 理性的推論能力の自然に対する相対性からの分離・独立を集団レベルで実現することを可能にすると考えられる唯一の手立ては、基礎的な理性的推論能力の源泉としての自然言語の習得であろう。言語の習得は可能性を手に入れることでしかない。しかし、可能性は言語の習得によって等しく与えられると考えられる。私たちは言語を後天的に習得することができるだけである。脳の成長は、人間の場合、生まれてから後も何年も続く。その間に人間の子供は、先ず言葉を発するようになる前に、人間の作った作り物の世界に誘導される。子供の注意力は散漫で、記憶力は鈍い。しかし、そのことがかえって、一つ一つの記憶を反復することによって強化する連合による記憶方式とは別の、ものを大ざっぱに記号化して実際にはその記号を操作するだけの概念的な記憶方式(これも記憶方式の一つではあろう)への移行(あるいは

は、そのような記憶方式の発見)を容易にするとされる。このような移行(発見)は、促されたり導かれたりして実現するものではあるが、実質は完全に自発的なものであると考えられる。逆に言えば、自分でできない者に教えることは容易ではない。潜在的には、このような記号操作能力は、類人猿に既に備わっているものと見える。幼いカンジは自分でできた。年長の3頭のうち1頭は全くできなかった。他の2頭は苦労した末にやっと少しだけできた。できるようになるには、人間で言えば、4歳までの間に(あるいは、その間ずっと)学習する機会(発見する機会)が与えられる必要がある。脳の成長と同時並行的に与えられる必要があるということであろう。^{*13}

私たちは、4万年前も今も、生まれてくるときには同じホモ・サピエンスとして、ヒトとして、身体的・遺伝的条件は実質的には何も変わらない存在として、生まれてくるのであると考えられる。しかし、4万年前には、人間というような存在になる可能性は、実は存在しなかったのかも知れない。だが、今は存在する。私たちはヒトとして生まれてきた後に、それから人間というような何か別の存在になるのだと考えられる。上で言った内的条件が整えられるというのは、そういうことであると思われる。生まれると同時に、内的条件を整えるための準備、第一次的な能力・可能性としての身体的条件(かなり幅があると考えられる)の用意はできている必要がある。しかし、私たちはそれだけでは人間にはなれない仕組みになっている。そのような第一次的な能力・可能性を内的条件である二つの能力・可能性として現実化する(あるいは、内的条件である二つの能力・可能性として使用できるように、それを第二次的な能力・可能性として実現する)ということをしなければならない。第一次的な身体的能力を自転車に乗るための能力として現実化するというのと同じである。私たちの身体的可能性というのは、大脳皮質のそれも含めて、このような可塑性を相当の範囲で有しているものと考えられる。言い換えれば、脳を大きくすることによって、私たちはこのような可塑性をより多く持つ方向へと進化してきたということであろう。私たちの能力は、実際には生まれてきた後に或る特定の仕方で現実化されることによってはじめて使いものになるということである。

私たちの脳は特定の目的のために進化したのではないからこういうことが

あり得るとも言える。人間になるために必要な初期条件というのは、素材としての身体的能力と、その素材を基にして生まれた後の数年間で一定の能力が（完全には更にその後で）実現されるようにする成長遅滞と、その能力の実現を（ゆるやかに）方向付ける外圧としての選択圧であろう。選択圧というのは要するに社会的必要性のことである。

ところで、私がここで「内的条件」と呼ぶ能力に関しては、基本的には言語と社会制度を習得することを通して実現されると考えられる。言語と社会制度は、実現されることになる能力に対しては外的な制約ないし規制・強制する何かとしてある。しかし、言語も社会制度も、それ自体が可変的・可塑的なものである。そして、それ自体が開かれた可能性を持つものであると思われる。つまり、もし不足や欠如や欠陥があれば、原則として常に補足・補修が可能であり、余分・過剰な部分があれば、削除・省略が可能である。しかし、基本的な部分に変更不可能であろう。少なくとも、変更不可能な部分があることは確かであろう。そういう部分を含めて、言語と社会制度は、私たちの外から私たちに与えられる。

外から与えられるものとしての言語というのは、具体的には母親のそれであり、家族のそれであり、仲間の・集団の・社会のそれであろう。しかし、習得することになるのは、（誰から教わるのであろうと変わることがなく共通であるという意味で）不変的で（誰もが同じように習得し得るという意味で）基礎的な能力としての言語能力であり、理性的な推論能力であり、そして意図的に行為する能力である。このような不変的・基礎的な能力をどういうものに仕上げていくか（あるいは、どのレベルまで引き上げていくか）ということは、すべて個々人の問題である。このように個々人によって異なる可変的・応用的な部分（その範囲）というのは、決して小さくはないように思われる。そのことに加えて、生来的な機構を土台として発達した感情システムと、そのシステムと一体化して発達した複雑な価値と目的の社会的システムがある。結果として、人間のあり方は極めて可変的で多種多様であるということになる。

しかし、人間性の定義は、上で言った、私たちが生まれてきた後にのみ実現することができる能力・可能性の不変的・基礎的な部分、そういう部分を

確定することができれば、それによって可能になると考えられる。そして、人間が理性的な存在である（そのように定義される）というのは、恐らくは正しいのであろう。しかし、私たちははじめから本来の意味で理性的な存在であって、生まれたときからそういうものとして既に人間であるというのではなくて、生まれてきた後に自発的に、本来の意味で理性的と言われるようなそういう存在になることによって人間になるのであると思われる。

3 どの時点で（現実にはそういうものになるという意味で）私たちがそういうものになるのかを、制度的・慣行的になされている以上に確定することは、極めて難しいであろう。複雑な社会の価値と目的のシステムを、少なくとも或る程度は（どの程度かは社会の要求によって異なるであろう）理解する必要があるであろう。理性的・合理的に推論する能力というのは、人間の行為の合理性に関わる能力である。それは、目的の実現を目指して意図的に行為する能力と一つになって、自分の行為を理由付けたり正当化したり、あるいは他人の行為を理由・動機・意図・目的に基づいて理解する能力である。^{*14}

このような能力は、如何なる意味でも特権的な（特別に選抜された者だけに許される）能力であるということはないであろう。むしろ、特別なものになることによって（実際には、そう思い込むことによって）破綻することになる能力である。そうなるのは、合理性の必要条件としての社会性・一般性を欠くことによってである。合理性というのは単なる理屈の集合のことではない。社会の複雑な価値と目的のシステムから遊離して理屈を弄ぶ場合には、それを合理的・理性的とは言わない。社会性・一般性を著しく欠く議論は妄想に等しいであろう。知識・技能の所有は特権的なものであり得る。つまり、知識・技能の所有は一部の選ばれた者にのみ許されるということがあり得る。例えば、私は単純に特定の場所にいることによって、他の人には知り得ない何かを知ることになるかも知れない。あるいは、私は特殊な試験に合格することによって、特別な知識・技能を伝授されることになるかも知れない。このような特権性というのは（知識の名に値する）知識の本質的な特徴の一つであると言えるかも知れない。これに対して、理性的思考の場合は、理性的なものである限りは、知識・技能と同じような意味で特権的であるということこ

とはあり得ないと思われる。私の考え・思考は、特権的に得られた知識とか情報に基づくものであるかも知れない。だが、そのような情報・知識に基づく判断としては、私の判断は一般的に見て理性的・合理的な判断である、理性的な人であれば誰もがするような妥当な判断である、と見なされ得るのではない。知識・情報は特権的なものであり得るが、理性的判断・思考は一般的・公共的なものである。私の判断が一般性を欠く（一般的に見て正当・妥当と見なされない）場合には、私の判断には何か問題がある（こじつけとかごまかしとか何か不正・不当なことをしている）ということになるであろう。

他方で、理性的能力の実現（第一次の実現）には個人差があり得る。もちろん、人並みの実現というのが一般的で、並はずれて高度に実現するというのは稀であろう。しかし、そうだとすると、稀ではあるが並はずれて高度に実現（第二次の実現）された理性的思考というものもあり得る。そういうものを誰もが同じように実現できるあるいは理解できるとすることは、多分できないであろう。そういう意味で、その種の理性的思考は一般性を欠く、特権的なものであると言われるかも知れない。しかし、この場合の個人差というのは、理性的思考能力の実現を「外的に」限界付けると考えられる諸条件（授けられる教育の内容とか与えられる知性的素質のあり方）に関わる部分を除けば、基本的には自発性の問題である。言い換えれば、本人の意欲と姿勢の問題である。だから、理性的であろうとする（よく・正しく考えようとする、よく・正しく思案しようとする、正当な理由・根拠に基づいて実践的・理論的に正しく推論しようとする、思慮深くあろうとする）者だけが理性的であり得るということになる。グライスはそう言っている。これは基本的に正しいと考えられる。理性的な思考を高度に実現するということに関しても同様であろう。高度に実現するというのは、例えば反省的・批判的思考を高度に実現するということである。哲学や形而上学というのは、そのような反省的思考の一種である。^{*15}

哲学や形而上学を（何か特別な種類の）知識と考えるのは誤りであるように思われる。このような「学問」に興味を持つ者は多くはない。しかし、興味を持つ者は少数の選ばれた者だけである、少数の選ばれた者だけが興味を

持つことを許される、というようなことはないであろう。大多数の人は単純に興味を持たない、というだけのことであろう。徹底して反省的であろうとする者の数が常に限られているというのは、単純に「完全に偶然的な事実である」と言い切ることはできないかも知れない。単なる偶然ではないとする理由は幾つか考えられる。つまり、私たちが反省的であろうとすることを、偶然ではなく何らか必然的に、困難にするような理由である。例えば、誰もが非反省的な思い込みから出発する必然性があるということも、そのような理由の一つ（あるいはこれが決定的な理由であるかも知れない）であろう。そのような非反省的な思い込みをソクラテス的なやり方で（あるいは非ソクラテス的なやり方で）批判的・反省的に吟味する哲学的な作業も、そう簡単ではない。場合によってはひどく感情的な抵抗を伴うということもあるが、そもそもやり方がよくわからないと言われるかも知れない。更に、グライスのそれのように（あるいは、アリストテレスとかカントのそれのように、と言うべきか）洗練された形而上学的思考を実現するには、別種の困難を乗り越える必要があると言われるかも知れない。それは、尋常ではない難しさ、誰も普通は考えようとしないうことを考える難しさである、と言われるかも知れない。では、このような反省的思考は、はじめから一般性を持ち得ないはずべきであろうか。

4 形而上学的思考が一般的なものであるとは言い難い。しかし、特権的なものであるとも思われない。難しいのは事実である。しかも、何が面白いのか、何の意味があるのか、よく分からないから、多くの人は見向きもしないのであろう。山登りに似ているかも知れない。山登りは特権的なものではない。誰でもできる。確かに、槍とか穂高ということになると少しは難しいかも知れないが、最終的には行って見たいと思うかどうかであらう。少なくとも、誰でも試みることは可能である。そして、そのために（試みるために）必要な能力というのは特別なものではない。

反省的思考を試みるために必要な能力というのも特別なものではない。基本的には普通の意味での言語能力がありさえすればよい。言語（自然言語）というのは、価値と目的のシステムと合理性を保存し伝達しそして修正する

ための仕組みである。言語がそのような仕組みであるというのは、言語にとっては偶然であるかも知れない。言語ははじめからそのようなものとしてあったとかそのようなものとして作られたということは、恐らくはないであろう。しかし、言語が（ビジン段階からクレオール段階へと成熟完成するように）成熟完成するというの、そのようなものになるということであると思われる。そして、どの言語もそのような仕組みとして十分な可能性を有すると考えられる。どの言語も、もし足りないものがあれば補う、新しく作る、よそから持ってきて付け加える、そういうことを許す柔軟性を持つと言える。しかし、柔軟性はあっても、そう自由にできるものではない。価値と目的のシステムは可変的だが安定したシステムである。

言語を習得するというの、結局のところ、ホモ・サピエンスではなくて人間という種を保存し継承するための、最も確実で有効なやり方であると言えるように思われる。それは（遺伝の仕組みに比べれば、大幅な）変化を許容しつつ保存し継承するというやり方である。言語というのは或る種の外部記憶装置のようなものであると言えるかも知れない。内部記憶装置（の一つ）である遺伝の仕組みは、柔軟性を著しく欠くものである。柔軟な仕組みというのは、言語のような、或る意味では外部にあると言えるような仕組みとしてでなければ、実現できないものなのかも知れない。^{*16}

ところで、価値と目的のシステムは行為を正当化する理由を構成するものである。それだけのものではないが、それだけのものであったとしても相当なものである。理由は推論の結論（あるいは行為）を正当化する。理由は基本的に集合的なものである。理由の或る集合は他の競合する理由の集合を退ける力を持つ。理由の集合に含まれる一つ一つの主張の正しさ（或る場合には真実性、或る場合には正当性）とそれらの間の整合性がその力の源であろう。しかし、複数のシステムが可能であるように思われる。少なくとも、一つのシステムだけが可能であるとする理由は見当たらない。しかし、何が結論であれ、結論である行為・判断を正当化し得る理由の集合を任意に構成できるとは思われない。その可能性は自ずから制限されると考えられる。そして、理由の集合は事実的判断の集合と論理的判断の集合を含むということによって、なぜその可能性が制限されるかは説明されることになるのかも知れ

ない。^{*17}

特定の個人、特定の集団について、行為を正当化する理由の集合が、長い間（一生の間とか何世紀もの間）矛盾・不整合を含んだままであるということが、恐らくはあり得ると思われる。それでもその個人・集団は非理性的であるとは言われないであろう。他方で、特定の個人・集団が狂信的・非理性的と言われることは、言うまでもなくある。その違いは、自然言語に蓄積された「記述と評価と説明のシステム」全体からの「距離」にあると思われる。その「距離」を判定するのは特定の個人ではない。社会全体である。しかし、この問題は単純ではない。別の機会に詳しく論じたい。

註

* 1 岡部 1998 参照。

* 2 「実体の変容」については、Grice 1991, 81-7 参照。人類学者の方は *symbolic explosion* とか *human revolution* と百っているようである。

* 3 或るレベルまでは言語抜きで到達できるという意味で「無関係であった」と言えるのではないかと思う。

* 4 言語が発達した時期と、芸術が発生した時期、そして技術が飛躍的に進歩した時期が同時並行的であったとする考え方があり得る。ストリンガー・ギャンブル 1997 参照。

* 5 ビジン語の使用は状況依存的・文脈依存的であると言えよう。人類の初期の言語も同様であったと考えられる。成熟した言語の特徴はその自律性にある。

* 6 感情と欲求・欲望については、戸田 1992 参照。

* 7 私は、一方で、言語は完全に自発性の産物であると考え、他方で、完全に外的に発達を促されたと考える。

* 8 この変化というのは *Homo sapiens* から *person* への変化であるというようなそういう「実体の変化」であるということもグライスは百っているのである。

* 9 感情は、大集団化が進むに連れて、集団維持システムとしてうまく機能しなくなってきたという見方は、全面的に正しいとは言えないように思われる。この点を詳しく論じることは、自然史における集団的評価システムと文化史における集団的評価システムの連続と不連続について論じることを意味する。

* 10 どの程度発達し得るかは問題であろう。嘘をつくことができるためには記憶力と計画性が必要である。動物の場合には必ずから限界がある。

* 11 もしかすると、現生人類にだけこのような競合関係が生じたのであって、私たちがこのような競合関係を生き抜こうとしているということなのかも知れない。

* 12 「意図的に行為する能力」というのは、決定的な部分は後天的なものであろう。このこととアクラシアについては、以前にも論じたことがあるが（岡部 1995 第 7 章）、今回改めて論じる必要があるように思った。

- *13 私たちは「文法」を、教えられるというよりは、自分で発見するらしい。それは世界の「構造」を発見するようなものである。
- *14 基礎的能力が備わった(成人した)と見なされる時期については、幅はあるが、制度的にあるいは慣習的に決まっていると首える。しかし、そのような能力の完成とか成熟ということについては、恐らくは限度はないと思われる。
- *15 「自発性」については、Grice 2001, 33-4 の議論が特に印象的である。
- *16 もちろん、柔軟な外部記憶装置の可能性それ自体は大脳皮質の可塑性に由来するものであろう。
- *17 複数のシステムの可能性については、Grice 2001, 133-4 参照。

参考文献

- エイステン, J., 『ことば 始まりと進化の謎を解く』, 新曜社, 1999.
- Aitchison, J., *Words in the Mind: An Introduction to the Mental Lexicon*, 2ed ed., Oxford: Blackwell, 1994.
- アンスコム, G.E.M., 『インテンション 実践知の考察』, 産業図書, 1984.
- Anscombe, G.E.M., Intention, *Proceedings of the Aristotelian Society* 57, 1956-7; and in her *Metaphysics and the Philosophy of Mind*, Oxford: Blackwell, 1981, 75-82.
- オースティン, J., 『オースティン哲学論文集』, 勁草書房, 1991.
- ピッカートン, D., 『ことばの進化論』, 勁草書房, 1998.
- Charles, D., Aristotle and Modern Realism, in R.Heinaman ed., *Aristotle and Moral Realism*, London: UCL Press, 1995, 135-72.
- *Aristotle on Meaning and Essence*, Oxford: Oxford University Press, 2000.
- Wittgenstein's Builders and Aristotle's Craftsmen, in Charles and W.Child eds., *Wittgensteinian Themes: Essays in Honour of David Pears*, Oxford: Oxford University Press, 2001, 49-79.
- デイヴィッドソン, D., 『行為と出来事』, 勁草書房, 1990.
- ディーコン, T., 『ヒトはいかにして人になったか 言語と脳の共進化』, 新曜社, 1999.
- デネット, D., 『心はどこにあるのか』, 草思社, 1997.
- De Sousa, R., *The Rationality of Emotion*, Cambridge, Mass.: The MIT Press, 1987.
- ダメット, M., 『分析哲学の起源 言語への展開』, 勁草書房, 1998.
- Dummett, M., The Reality of the Past, *Proceedings of the Aristotelian Society* 69, 1969, 239-58; and in his *Truth and Other Enigmas*, London: Duckworth, 1978, 358-74.
- The Source of the Concept of Truth, in G.Bohoss ed., *Meaning and Method: Essays in Honor of Hilary Putnam*, Cambridge: Cambridge University Press, 1990; and in his *The Seas of Language*, Oxford: Oxford University Press, 1993, 188-201.
- *The Logical Basis of Metaphysics*, Cambridge, Mass.: Harvard University Press, 1991.
- ダンバー, R., 『科学がきらわれる理由』, 青土社, 1997.
- フォーリー, R., 『ホミニッド ヒトになれなかった人類たち』, 大月書店, 1997.
- Grandy, E.R. and Warner, R., eds, *Philosophical Grounds of Rationality*, Oxford: Oxford University Press, 1986.
- Grice, P., Actions and Events, *Pacific Philosophical Quarterly* 67, 1986, 1-35.

- Aristotle on the Multiplicity of Being, *Pacific Philosophical Quarterly* 69, 1988, 175-200.
- Studies in the Ways of Words*, Cambridge, Mass.: Harvard University Press, 1989.
- The Conception of Value*, Oxford: Oxford University Press, 1991.
- Aspects of Reason*, Oxford: Oxford University Press, 2001.
- Guttenplan, S., Moral Realism and Moral Dilemmas, *Proceedings of the Aristotelian Society* 80, 1980, 61-80.
- ハンフリー, N., 『内なる目 意識の進化論』, 紀伊國屋書店 (科学選書16), 1993.
- 黒田亘, 『行為と規範』, 勁草書房, 1992.
- ルーイン, R., 『現生人類の起源』, 東京化学同人, 1999.
- McDowell, J., Aesthetic Value, Objectivity, and the Fabric of the World, in E.Schaper ed., *Pleasure, Preference, and Value*, Cambridge: Cambridge University Press, 1983, 1-16; and in his *Mind, Value, and Reality*, Cambridge Mass.: Harvard University Press, 1998, 112-30.
- Values and Secondary Qualities, in T.Honderich ed., *Morality and Objectivity*, London: Routledge, 1985; and in his *Mind, Value, and Reality*, 1998, 131-50.
- Mind and World*, Cambridge, Mass.: Harvard University Press, 1994.
- Mellars, P. and Stringer, C., eds., *The Human Revolution*, Princeton: Princeton University Press, 1989.
- 西田利貞, 『人間性はどこから来たか』, 京都大学学術出版会, 1999.
- 西田正規・北村光二・山極寿一編, 『人間性の起源と進化』, 昭和堂, 2003.
- 岡部勉, 『行為と価値の哲学』, 九州大学出版会, 1995.
- 「反自然主義—個体の意味 (あるいは生きることの意味) について」, 『文学部論叢』 58, 1998, 37-60.
- 「感情と理性の起源—真理と価値の起源に関する一考察」, 『文学部論叢』 76, 2003, 55-74.
- ロジャース, L., 『意識する動物たち』, 青土社, 1999.
- Savage-Rumbaugh, S. and Rumbaugh, D., The Emergence of Language, K.R.Gibson and T.Ingold eds., *Tools, Language, and Cognition in Human Evolution*, Cambridge: Cambridge University Press, 1993.
- ストリンガー, C.・キャンブル, C., 『ネアンデルタール人とは誰か』, 朝日新聞社 (朝日選書576), 1997.
- 戸田正直, 『感情人を動かしている適応プログラム』, 東京大学出版会 (認知科学選書24), 1992.
- トレフィル, J., 『人間がサルやコンピュータと違うホントの理由』, 日本経済新聞社, 1999.
- ヴォークレー, J., 『動物のころを探る』, 新曜社, 1999.
- Wiggins, D., Truth, Invention, and the Meaning of Life, *Proceedings of the British Academy* 62, 1976; and in his *Needs, Values, Truth*, Oxford: Blackwell, 1987, 87-137.
- Deliberation and Practical Reason, A.Rorty ed., *Essays on Aristotle's Ethics*, Berkeley: University of California Press, 1980, 221-40; and in his *Needs, Values, Truth*, 1987, 215-37.
- Truth, and Truth as Predicated of Moral Judgments, in his *Needs, Values, Truth*, 1987, 139-84.
- A Sensible Subjectivism?, in his *Needs, Values, Truth*, 1987, 185-214.
- Eudaimonism and Realism in Aristotle's Ethics: A Reply to John McDowell, in Heinaman ed., *Aristotle and Moral Realism*, 1995, 219-31.
- Objective and Subjective in Ethics, with Two Postscripts on Truth, B.Hooker ed., *Truth in Ethics*, Oxford: Blackwell, 1996, 35-50.
- Natural and Artificial Virtues: A Vindication of Hume's Scheme, R.Crisp ed., *How Should One*

Live?: Essays on the Virtues, Oxford: Oxford University Press, 1996, 131-40.

ウィリアムズ, B.A.O., 『生き方について哲学は何が言えるか』, 産業図書, 1993.

Williams, B.A.O., Ethical Consistency, *Proceedings of the Aristotelian Society*, supplementary volume 39, 1965; and in his *Problems of the Self*, Cambridge: Cambridge University Press, 1973, 166-86.

—Truth in Ethics, Hooker ed., *Truth in Ethics*, 1996, 19-34.

—*Truth and Truthfulness*, Princeton: Princeton University Press, 2002.

ウィンチ, P., 『倫理と行為』, 勁草書房, 1987.

Winch, P., The Universalizability of Moral Judgements, *The Monist* 49, 1965, 196-214; and in his *Ethics and Action*, London: Routledge, 1972.

山極寿一, 『家族の起源 父性の登場』, 東京大学出版会, 1994.